真摯な共同作業の成果
――ビショップに捧げられたロウエルのソネット四連作

森田　孟

詩人が自作の詩を互いに贈答し合うのは古今東西にみられる現象で、我が国では古くは、『萬葉集』巻第十五に、中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子との間にやり取りされた六十三首（前者から四十首、後者から二十三首）が集められていて有名である。

アメリカ詩の世界でも例は枚挙に遑がないが、エリザベス・ビショップ（Elizabeth Bishop, 1911–79）とロバート・ロウエル（Robert Lowell, 1917–77）の場合は特に注目に値しよう。彼らは初対面以来三十年余りに亘って、互いに深く敬愛し、心を交わせ合った掛け替えのない芸術上の伴侶同志で、詩や詩集も献呈し合った。その交流の詳細については、拙稿「エリザベス・ビショップとロバート・ロウエル」[*1]を参照されたいが、そこで十全に扱えなかったロウエルのソネット四篇を、ここに拙訳によって紹介したい。いずれも『詩集成』[*2]では、総数三六八篇の押韻構成のかなり自由なソネット作品（そのうちの一篇は、三行だけで十四行を暗示しているような趣の詩）[*3]から成るロウエルの七冊目の詩集『歴史』[*4]に収録されている。

エリザベス・ビショップへ（二十五年）　その一、水[*5]

ストニングトン[(1)]では毎朝　人手を一杯積んだ船が
島の大理石切り出し場へ向かって巡航する、
岩の丘に牡蠣殻のように張り付いた何十軒もの

吹き曝しの白い木造家屋を後にしては。覚えていますか？
私たちは平たい岩板に坐っています。これ程時が隔ると
それは腐って紫がかってゆくイチハツの色にみえるが
いつもと変らぬ灰色の岩にすぎず
海に浸されると生き活きとした緑色になるだけで……
海は私たちの足許の岩を薄片に削ぎ取りながらひたひた洗
い続けていた、
餌を捜す魚がかかるマッチ棒のような迷路めいた簗を。
あなたは夢みていました　自分は人魚で波止場の杭にしが
みついて
両手でフジツボを引っ張ろうとしているのだと。
私たちは希っています　私ら二つの魂が鷗のようにあの岩
に戻って
いってくれればいいと。結局、水は冷たすぎたのでした
私たちには。

訳注

（1）　ペノブスコット（Penobscot）湾内東寄りのディア島（Deer Isle）――紅大理石の採掘で有名――の最南端にある港。

この詩の九十六パーセントの語句は、ロウエルの五冊目の詩集『北軍の死者へ』[*6]の冒頭に収められた四行詩八連の作品「水」に使用されているもので、この作品の全くのソネット化になっている。その詩、「水」を、拙訳で並記してみよう。

水　Water[*7]

メイン州のロブスターの町でのこと――
毎朝　人手を一杯積んだ船が
島々の大理石の切り出し場それぞれへ
向かって　押し出して行った、

岩の丘の一つに
牡蠣殻のように
張り付いた何十軒もの吹き曝しの
白い木造家屋を後にして

私たちの下方では　海がひたひた浸していた

餌を捜す魚がかかる
未使用の小さなマッチ棒のような
迷路めいた簗を。

覚えていますか？私たちは平たい岩板に坐っていました。
これ程時が隔ると
それは腐って紫がかってゆく
イチハツの色にみえるが

いつもと変らぬ灰色の
岩にすぎなかった、
海に浸されると
いつもと変らぬ緑色になるだけだった。

海は終日　私たちの足許の
岩を浸しては
引き裂き続けたのでした
一片また一片と。

ある晩　あなたは夢みていました
自分は人魚で　波止場の杭にしがみついて
両手でフジツボを
引き剝がそうとしているのだ　と。

私たちは希ったのでした　私ら二つの魂が
鷗のようにあの岩に戻って
いってくれればいいと、結局、
水は冷たすぎたのでした　私たちには。

こうして並べてみれば一目瞭然のように、この二篇は詩型の異なる殆ど全く同じ作品で、ストニングトンがロブスター（伊勢エビ）の水揚げの町でもあることが新たに判ってからは四行詩八連の詩がその流れのままにソネットへと姿を変えてゆき、「水」の第七連、第八連はほぼそのままソネットのそれぞれ一一―一二行目と一三―一四行目になって収まっている。

八連の詩の、本稿筆者が傍点を付した語句が、ソネットで変更されている箇処で、異なっている部分だが、それをみてみれば――

「切り出し場それぞれ」（quarries）→「切り出し場」

(quarry)［複数形が単数形に］

「押し出して行った」(pushed) →「巡行する」(cruise)［過去形も現在形に］

「丘の一つ」(a hill) →「(あの) 丘」(the hill)［不定冠詞が定冠詞に］

「後にして (行った)」(left) →「後にしては」(leaving)［過去形が現在分詞に］

「ひたひた浸していた」(drenched) →「ひたひた洗って」(lapping)［意識した技法として以外は同じ語を一作品に反復したりは決してしなかったビショップに贈る詩なのだから、ロウエルも初めの 'drench' をソネットでは'lap' に変えて反復を避けたのだろう］

「未使用の小さな」(raw little) →ナシ

「平たい岩板 (なるもの)」(a slab) →「(そこの) 平たい岩板」(the slab)［不定冠詞が定冠詞に］

「坐っていました」(sat) →「坐っています」(sit)［過去形が現在形に］

「いつもと変らぬ」(usual) →「生き活きとした」(fresh)［後の 'usual' の反復を避けて］

「終日」(all day) →ナシ

「引き裂き続けた　一片また一片と」(tearing away/flake after flake) →「薄片に削ぎ取った」(flaked)［波が岩にぶつかっては飛沫を散らす様子の見事な描写！］

「引き剝がす」(pull off) →「引っ張る」(pull)［乱暴にみえる動作を和らげている］

「希った」(wished) →「希っている」(wish)［過去形を現在形に］

四行詩八連の作品の過去形を現在形にして現在の臨場感を出し、不定冠詞を定冠詞に変えて一般性を二人だけの馴染みの状景性にし、同一語の反復を無くす配慮をしてビショップへの贈物に相応しい入念な作品に造形し直していることが窺えよう。

作中の語句を念入りに吟味・点検して使用したビショップ[*8]が五十年余りの間に公表した詩作品は、『全詩集』[*9]に収録されている一一五篇だけだが、実はそのうちの三三篇で「水」'water' を単数形で六一度、複数形で四度（因に「海」'sea' は単数形で六〇度、複数形で三度）使っているのである。[*10]「水」は自作の三篇から四篇に一回の割合でビショップの念頭に現れた語彙で、同語使用の極めて少ない

彼女にしては〈偏愛〉した語と言ってよいのだが、それはこの詩人の全作品を精査して判明することだ。「水」をビショップへの最初のソネットの標題にしたロウエルは、早い時期に彼女の本質を把握していたことになる。「愛情」の為さしめた業（わざ）であったに相違あるまい。

このソネットの行末語に二度ずつ現れる‘hands’と‘rock’（は七行目末と一三行目末の他にも行中に更に二度、総計四度）は、やはりこの詩の鍵語であろう。

一行目の‘hands’は「働き手たち」で、提喩（synecdoche）――「手」という一部分で「人間」全体を表す――、一二行目のは、フジツボを引っ張り剝がそうとするビショップの手そのものだが、この海産甲殻類を指す‘barnacle’には、「（進歩の妨げとなる）古い習慣・制度など」（*Webster*, 3ed.）を表す意味がある。このソネットは、旧習に静かに「岩」の意志で敢然と挑戦して新しい詩の創作に精進する（ロウエル自身その一人と自負する）「働き手」のビショップに対する熱い声援（エール）であった。と同時に、柔軟で寛大な心の優しいビショップの内面の「岩」をロウエルは「削る」ことが出来ず、「水」を冷たすぎるままで終らせた悔いの表明でもあったろうか。そしてそれによって尚もビショップの心に自らの思いを訴えようともする作品にみえる。

＊

エリザベス・ビショップへ　その二、
メイン州　キャスティン[*11]

十代の継ぎ接ぎジーンズとソフトボール――キャスティン[1]
　広場は
『アメリカの少年』誌の表紙のようだ。
我が家の十二フィートのヒマラヤ杉の生垣は人間の姿を遮
　断する、
『北と南』[2]、ヤーマス[3]からリオへ、大西洋の一沿岸へ――
あなたは生活の場を別の所に見つけることはなかった、
その途方もない記憶により一つの既知の経度に縛られて。
大ブリテン島の歴代のジョージ[4]があなたの天宮図を支配す
　る、
鈴付き道化師帽を戴いた狂ったジョージ三世よ万歳、
他のどこでもないあなたのノヴァ・スコシアの王だ――
白い鬚の顰（あごひげみみしい）にして盲（めしい）で〈イギリス国教会〉を歌っている、
彼がハープシコードで伴奏をつけた讃美歌なのだ。
「私　馬だったらいいのに」とあなたは言う「あるいはシ

チリア人ね、
私のいつものグレニッチ・ヴィリッジの酒場に居すわって
お酒を奢ったりしながら…そして決して外へは出ないでいるのよ」と。

訳注

（1） 大西洋の入江、ペノブスコット湾の東側にあるメイン州南東の同州最古の町の一つで、漁業や保養・行楽の中心。ロウエルが夏を過ごすことにしていた地。この南方に、先刻の「ソネット　その一」のストニングトンがあるディア島が位置する。

（2） *North and South*（1946）. ビショップの最初の詩集。

（3） Yarmouth. カナダ南東部の半島ノヴァ・スコシアの町。ビショップはマサチューセッツ州中部の町ウスター（Worcester）で生れ、その生地やノヴァ・スコシアで育ち、ニューイングランドで教育を受け（名門ヴァッサー女子大学 Vassar College 卒）ニューヨーク、フロリダ、ブラジルに、そして最後はニューイングランドに住んだ。彼女は生後八か月にして父親がブライト病（蛋白尿と高血圧が特徴）で死去し、五歳の時には母親が精神病で入院して離別したまま再会できずに終わった。「途方もない記憶」とはそれらを指すものだろう。流浪の生活の範囲が一定の経度内だったということか。

（4） ジョージ一世は一七一四年に英国王に即位、その後継者がジョージ二世、三世及び四世。ジョージ三世（一七三八―一八二〇）の時にアメリカ植民地が独立した。七行目の「あなたの天宮図を支配する」（運命に影響を及ぼす、の意だろう）大ブリトン島の歴代のジョージは、ハノーヴァー家の面々であった。

この詩の一二行目以下について。ロウエルはこのソネットの素材をもっと以前に使おうとしていて、草稿詩の一篇「エリザベス・ビショップへ、リオ・デ・ジャネイロへ飛ぼうとして　一九五六年」[*12]には、次のような詩節が含まれている。

「あなたは、あのハノーヴァー[1]王家の面々の怖いもの知らずの力を備え
アルゴス[2]の眼を持って希うのです　自分が馬だったらと、
あるいはグレニッチ・ヴィリッジで主人役を務めんものと
泰然として親族たちに飲み物を奢る
シチリア人の家長だったらと、そして外出はしないのに

顔を利かせるのです　ロバート・フロスト[3]のように。」

訳注　（1）Hanover.　ドイツ北西部の旧州で現在のLower Saxony州の一地方。一七一四年―一八三七年の間、英国と同君連合だった。一七一四年から一九〇一年まで英国を支配したジョージ一世からヴィクトリア女王までのハノーヴァー王家。

（2）Argus.［ギリシャ神話］体中に眼を備えていた〈百眼の巨人〉牧夫。雌牛に変えられた美女イーオー（Io）の番をさせられていた時、ヘルメス（Hermes）に殺され、死後その眼は孔雀の尾羽の紋様になった。

（3）Robert Frost（1874–1963）。ケネディ大統領の就任式では祝詩を朗読したアメリカの国民詩人的存在。ニューハンプシャー州の農場で生活しながら勝れた作品を発表し続けた。ロウエルはハーバード大学の学生になってフロストと出逢って以来尊敬し続けた。フロスト宛て書翰五通が公刊されている（＊14　*Letters of RL*, pp. 66–67, 138, 190, 325.）

ビショップに贈られた「ソネットその二」については、彼女からのロウエル宛て書翰の一通から更に判ることがある。一九五七年一二月一一日付でブラジルのペトロポリスから、ビショップは次のように書いている。

私についての詩「メイン州キャスティン」だが、母が言ったと思われている表現、「私はただあなたを　殺したいだけよ」'All I want/To do is kill you!' は変更して下さらないだろうか。母はそのようなことは決して言いませんでした。実のところ私は、そのような直接の脅しは覚えていません。母親としての戒め以外は、と。[*13]

この書翰は、その一週間前の一二月三日付きでロウエルから送られた手紙[*14]への返信だった。それは彼がビショップから贈られたオペラのレコード「来たれ汝ら芸術の子らよ」"Come ye sons of art" の礼状だったが、それに「更にもう三篇、もっと粗稿状態のものを以前に見てもらってあった詩」が同封されていたのだった。その中の「ソネット その二」の詩句に、母親の言葉として「あなたを殺したい」というのがあったわけである。

先刻簡単に触れたように、エリザベス・ビショップの母親は夫［エリザベスの父］の病死の衝撃から立ち直れず精神に異常を来し、狂乱の発作を繰り返しながら病院に収容され十数年間回復しないまま他界した。娘のエリザベスはその間、一度も母親に逢うことはなかった。手紙で言及のあるのは、その母のことである。彼女についてはロウエル

は、詩人自身から直接に、あるいはその詩や短篇作品などから間接に情報を得ていたが、件の母親の言辞とされるものはビショップの主張どおり事実ではなく、ロウエルの聞き・読み違いか、彼の想像力が別の言葉を歪めたかしたものであろう。仮りに〈事実〉だったにしろ、当事者が望まないことはすべきでない。彼女の希いは当然ながら聞き入れられて、その語句は決定稿から消えたのだった。

一般に「事実」なら何でも表現されていいとはおよそ限らない。言うまでもないが、芸術は、〈表現の自由〉を金科玉条として、それに根底を支えられて成立する文化現象である。但し、その〈自由〉に、健全・善良なる特定の個人を傷つける自由は断固含まれないということは、全ての芸術創造に携わる者が肝に銘じて実践すべき金科玉条であることも言を俟たない。世に言うモデル問題を惹き起すようなものは芸術の名に値しないことは先刻周知であろう。「報道の自由」に関しても根本精神は同じであるが、「報道」の本質上その「自由」には、一層単純ならざる「制限」の配慮が必要とされよう。要するに全て自由には何らかの制限は付きものであり、制限あっての自由なのだから。

「ソネット　その二」は、ビショップの生活史に触れ、彼女のとある言辞、及び彼女の原点の一つとも言うべき地ノヴァ・スコシアに纏わるハノーヴァー家の王のイメージを使って、ビショップの姿を象徴的に浮上させた作品ということになろう。

＊

エリザベス・ビショップへ　その三、
詩付き書翰のための詩付き書翰[*15]

「御心配下さるのは尤もですが、ただどうかご無用にね、
私自身は些か悩んでいますが。私はどういうわけか
これまで立ち向かわねばならなかった状況の中でも最悪の
事態に落ち込んでいます。抜け出す道が見付かりません。
キャル[1]、あなた洞窟を抜け出たことおあり？
私はありましたよ、メキシコで、とても嫌なものでした。
ここの近くの有名なのは未だやってみたことありません…
何時間もよろよろ歩きとおした挙句ようやく、
前方に日の光が、仄かな青いきらめきが　見えるのです、
空気がこれほど美しくみえたことはありませんでした。
そういうのが私が今待ちもうけている気がするものです、
この上なく幽かなきらめきを　これから私は探り出して

何とかここから生還しましょう。あなたのこの間のお手紙助かりました、
カンテラかスパイク付きの杖を送っていただいたみたいでした。」

訳注

（1） Cal. ビショップがロウエルに呼びかける時の愛称。元来はロウエル自身が親しい友人に手紙を書く時の自称。

全篇がそっくり全てビショップから自分に宛てられた書翰という形式のソネットを、ビショップへの贈物にしたこの詩は、実際、一九七〇年二月二七日付きでビショップがロウエルに宛てた手紙[*16]に基づいている。それは、ロウエルがビショップに贈ったソネット三篇「エリザベス・ビショップへ」――改訂版の『備忘録』*Notebook*（1970）のために彼が書いた「水」、「メイン州キャスティン」と「天職」“Vocation”［後に「職業」“Calling”と改題。本稿で次に紹介する四番目のソネット］――への返信で、「お手紙頂いてとても嬉しかった。勿論三篇の詩は大好きです。特に二番目の「メイン州キャスティン」、そして三番目［「ソネット　その四」］のものの、‘Do you’で始まる最後の四行は」で始まる心の籠った六段落（パラグラフ）から成る手紙だった。

ロウエルはこの書翰の第二段落の最初の三行、第六段落の七行[*17]殆ど全てを使ってもう一篇の十四行詩を書いたが、それが「エリザベス・ビショップへ」ソネット四連作の三番目として「詩付き書翰のための詩付き書翰」の題で『歴史』に収録された。この「ソネット　その三」は、四連作中最後に書かれたものだった。

外国のブラジルで女友だちと同居しながら暮すビショップには、詩作に励める時間の乏しさもあり、何かと思うにまかせないことが少なくなく、気の安まらない日々であった。そのような彼女の状況を知って心配するロウエルと、その気遣いに感謝しながら自ら元気を奮い立たせている五十九歳になったばかりのビショップの姿が、「洞窟を抜け出す」という鮮やかな独自の心象を伴う彼女の〈地声〉で描出された秀作であろう。

「あなたのこの間の手紙」というのは、公刊されている限りでは三か月少し前になるが、一九六九年一一月一〇日付き書翰[*18]であろうか。「あなたは打ちのめされておられたが不屈の精神で回復に向かっていらっしゃることでしょう

(You've had a buffeting time. But I see you are mending, indomitable.) と始まり、ワシントン大行進の週である今の様子、エズラ・パウンド、マリアン・ムーア、メアリー・マッカーシーといった共通の知友の文人たちの消息などを簡潔的確に知らせながら「私の愛情は全ていつものようにあなたへのもの、私はあなたが一緒に居て下さらなくて淋しいと生涯思い続けてすごしそうです (all my love as always to you. I seem to spend my life missing you.)」と、殺し文句?! で結んでいた。

それをビショップは、素直にというよりはおそらくロウエルを逆に気遣って (というのも彼は精神を病みがちな人でもあったから) 闇夜の道を照らす「カンテラ」か、滑り止めの「スパイク付きの杖」を送ってもらったみたいに勇気づけられたと、美しく見事に表現し返したのだが、ロウエルこそこの手紙によって大いに気分を昂揚させられ、それがこの「ソネット　その三」に結晶したのである。この詩は、ビショップとの紛れもない二人三脚の成果であった。

尚、ビショップのこの書翰には「ソネット　その二」にも、この上なく輝かしい効果 (the most brilliant effect) が表れていると思うと讃辞を呈しており、『若者の仲間』*The Youth's Companion* が私は確かに好きです (購読していたものです) とあるので[*19]、この雑誌名が、決定稿では、『アメリカの少年』に変えられたと判る。

手紙で草稿を見てもらい、反応を窺い伺いながら詩作を進めたロウエルだったのである。

＊

エリザベス・ビショップへ　その四[*20]

新しい絵画の生存に欠かせないのは　非常用携帯食[1]、
さっと激しい筆捌き、不朽の絵具の混合、
フランス風外光派[2]の〈戸外(プレネール)〉ではなく蛍光燈下の上階広間(ロフト)。
アルバート・ライダー[3]は自作の鰯焼き琥珀色月面風景画を
日光に当てて熟成させた。彼の描く絵は描き重ねだった、
彼の最小の作品でも手にするとずっしり重い。
騎手が止まれと叫ばなければ誰が殺されようか。
あなたは見たことおありだろうか　尺取虫[4]が木の葉の上を
這って行ってその先端にしがみつき　空中でひっくり返り
何かに摑まろうとして何かを探り求めている姿を。今も
あなたはあなたの言葉を　まだ宙吊りにしておくのだろう
か、十年間

仕上げないままで、あなたの告示板(5)に張りつけて隙間や
空白をまだ思い付けない言い回しのために開けたまま――
思いつきのものを完璧にする　誤ることなき詩の女神(ミューズ)よ。

訳注

（1）iron rations　缶詰など、特に軍隊用の。

（2）〈外光派〉'en plein air' 絵画とは、厳密には戸外で描く風景画のことだが、もっと一般には、風景画に戸外の(プレネール)(plein air) 印象を強く打ち出すことをいう（『大英百科事典』*Encyclopoedia Britannica*［2002］）。

（3）Albert Pinkham Ryder（1847–1917）。海の景色や神秘的な寓喩に富む風景を生涯に一五〇点ほど描いた幻想画家。彼の作品は濃い黄色い光か、通常は月の光に支配されている。彼は顔料の分厚い層を素早く重ねてからニスを塗って罅の入った表面を創り出した。以上、＊2ロバート・ローウエル『詩集成』Robert Lowell : *Collected Poems*, pp.1126–27.

（4）既に触れたように、ビショップに捧げられた「ソネット　その三」の基になった一九七〇年二月二七日付きのローウエル宛て書翰でビショップは、ここからの三行を引用しながら「私は尺取虫も気に入りました。それに、単に詩に関することだけでなく私が現在感じていることを実によく表してあって、本当に本当に有難う、あなたは実際にはお分りにならないでしょう、私がこれでどれ程元気づけられ、再びまた少し自分自身を取り戻せたか」と感謝している。＊13　Elizabeth Bishop, *One Art*, p.515.

（5）notice board　ビショップはマリアン・ムーアを見倣って自室に告示板を掲げておいて、そこに思い付いた詩句やメモを張りつけて日夜推敲した。

作者はまず、隣接領域の絵画の世界で〈新しさ〉に挑戦したアルバート・ライダーを詳細に引き合いに出して新しい絵画に言及する。どれ程の小品でも手にずっしりと重い、描き重ねの作品、そのようなライダーの絵画は詩の場合にも参考にならないだろうか、と示唆することで新しい詩を話題にして、新しい詩の創作に腐心するビショップへの贈物にしようとする。

ビショップは学生時代に、マリアン・ムーアと出逢い、爾来この二四歳年長の勝れた詩人・批評家に親昵し、指導者(メンター)として深く敬愛し続けることになるが、[*21] ムーアは常に完璧を目指して推敲に推敲を重ね、鏤骨彫心の詩作を心がけて甚だ寡作だった。ビショップはこのムーアを範としたのでもあろう、一層詩作に時間を費やした。そのような

ビショップにロウエルは、馬（詩）を操る騎手（詩人）は仕事を止めてはいけないのだと、この詩を贈って激励したのだった。

尺取虫の譬喩は今後も、アメリカ詩史上で燦然と光輝き続けることだろう。

ライダーの絵画を思わせる描き重ねを重ねながらロウエルがビショップに贈ったソネット四連作は、十数年の年月をかけた彼ら二人の真摯な共同作業の見事な成果であった。

本文の注

＊1　*American Literature Tsukuba*, No.3. 1988. pp.50–59.

＊2　Frank Bidart and David Gewanter, eds. Robert Lowell : *Collected Poems*. New York : Farrar, Straus and Giroux, 2003. 以下 *CP* と略記。

＊3　父さんへ　To Daddy

ぼくは思うのです、信じはしなかったけど、あなたは
　ぼくの通気孔だったと
海軍を辞職して通気孔になったのだと——
母なる人はぼくに靴履く前に靴下穿けと注意しないと。
　To Daddy

I think, though I didn't believe it, you were my airhole,
and resigned perhaps from the Navy to be an airhole
　——
that Mother not warn me to put my socks on before
　my shoes.（*CP*, p.513）

＊4　*History*（1973）, *CP*. pp.419–604.

＊5　For Elizabeth Bishop（twenty-five years）I.
　Water

At Stonington each morning boatloads of hands
cruise off for the granite quarry on the island,
leaving dozens of bleak white frame houses stuck
like oyster shells on the hill of rock. Remember?
We sit on the slab of rock. From this distance in time,
it seems the color of iris, rotting and turning purpler,
but it is only the usual gray rock
turning fresh green when drenched by the sea....
The sea flaked the rock at our feet, kept lapping the
　matchstick
mazes of weirs where fish for bait were trapped.
You dreamed you were a mermaid clinging to a wharf-
　pile,

trying to pull the barnacles with your hands.
We wish our two souls might return like gulls to the rock.
In the end, the water was too cold for us.（*CP*. p.593）

＊6　*For the Union Dead*（1964）, *CP*. pp.317–78.
＊7　Water

It was a Maine lobster town——
each morning boatloads of hands
pushed off for granite
quarries on the islands,

and left dozens of bleak
white frame houses stuck
like oyster shells
on a hill of rock,

and below us, the sea lapped
the raw little match-stick
mazes of a weir,
where the fish for bait were trapped.

Remember? We sat on a slab of rock.
From this distance in time,
it seems the color
of iris, rotting and turning purpler,

but it was only
the usual gray rock
turning the usual green
when drenched by the sea.

The sea drenched the rock
at our feet all day,
and kept tearing away
flake after flake.

One night you dreamed
you were a mermaid clinging to a wharf-pile,
and trying to pull
off the barnacles with your hands.

We wished our two souls
might return like gulls
to the rock. In the end,
the water was too cold for us.　（*CP*. pp.321–22）

＊8　その有様の詳細は、拙稿「エリザベス・ビショップ断章」「文藝言語研究・文藝篇十一」筑波大学（一九八七年）七九―一一二　を参照されたい。

＊9　Robert Giroux, ed, Elizabeth Bishop : *The Complete Poems : 1927–1976*. New York : Farrar, Straus and Giroux, 1983.

＊10　Anne Merrill Greenhalgh, *A Concordance to Elizabeth Bishop's Poetry*. New York : Garland Publishing, Inc. 1985. 参照。

＊11　For Elizabeth Bishop 2. Castine Maine

Teenage patched jeans and softball——the Castine-Common
looks like a cover for *The American Boy*.
My twelve-foot cedar hedge screens out the human.
North & South, Yarmouth to Rio, one Atlantic——
you've never found another place to live,
bound by your giant memory to one known longitude.
Britain's Georges rule your horoscope ;
long live mad George Three in cap and bells,
king in your Nova Scotia, nowhere else——
a whitebeard, deaf and blind, singing Church of England
hymns he accompanied on his harpsichord.
"I wish I were a horse," you say, "or a Sicilian
sitting in my own Greenwich Village bar,
standing drinks... and never going outdoors."

（*CP*. p.594）

＊12　草稿詩　"For Elizabeth Bishop : Flying to Rio de Janeiro 1956"（Houghton bMS Am 1905［2238］）

You, with those Hanoverians' dreadnought force,
the eyes of Argus, wish you were a horse,
or some pater familias Sicilian
in Greenwich Village, fixed to play the host,
stand blood relations drinks, and never go outdoors,
yet throw your weight about like Robert Frost.

（*CP*. p.1126）

＊13　*Elizabeth Bishop* : *One Art*. Letters, Selected and Edited by Robert Giroux. New York : The Noonday Press Farrar, Straus and Giroux. 1994. p.348. 以後、*One Art*.

＊14　Saskia Hamilton, ed. *The Letters of Robert Lowell*. New York : Farrar, Straus and Giroux. 2005. pp.305–6. 以後、*Letter of RL*.

＊15　For Elizabeth Bishop 3. Letter with Poems for

Letter with Poems

"You are right to worry, only please DON' T,
though I'm pretty worried myself. I've somehow got
into the worst situation I've ever
had to cope with. I can't see the way out.
Cal, have you ever gone through caves?
I did in Mexico, and hated them.
I haven't done the famous one near here....
Finally after hours of stumbling along,
you see daylight ahead, a faint blue glimmer ;
air never looked so beautiful before.
That is what I feel I'm waiting for :
a faintest glimmer I am going to get out
somehow alive from this. Your last letter helped,
like being mailed a lantern or a spiked stick."

(*CP*. p.594)

＊16　前掲書 *One Art*, pp. 515–17.

＊17　"Well, you are right to worry about me, only please DON' T!——I am pretty worried about myself. I have somehow got into the worst situation I have ever had to cope with and I can't see the way out." *Ibid*. p.515.

"Have you ever gone through caves?——I did once, in Mexico, and hated it so I've never gone through the famous ones right near here. Finally, after hours of stumbling along, one sees daylight ahead——faint blue glimmer——and it never looked so wonderful before. That's what I feel as though I were waiting for now——just the faintest glimmer that I'm going to get out of this somehow, alive. Meanwhile——your letter has helped tremendously——like being handed a lantern, or a spike walking stick." *Ibid*. p.517.

＊18　前掲書　*Letters of RL*, pp.525–26.

＊19　前掲書　*One Art*. p.515.

＊20　For Elizabeth Bishop 4

The new painting must live on iron rations,
rushed brushstrokes, indestructible paint-mix,
fluorescent lofts instead of French *plein air*.
Albert Ryder let his crackled amber moonscapes
ripen in sunlight. His painting was repainting,
his tiniest work weighs heavy in the hand.
Who is killed if the horseman never cry halt?
Have you seen an inchworm crawl on a leaf,
cling to the very end, revolve in air,
feeling for something to reach to something? Do

you still hang your words in air, ten years
unfinished, glued to your notice board, with gaps
or empties for the unimaginable phrase——
unerring Muse who makes the casual perfect?

（*CP*. p.595）

＊21　二人の交流の詳細は、拙稿「エリザベス・ビショップとアリアン・ムーア」*American Literature Tsukuba*, No.2. 1987. pp.40–50　を参照されたい。